性愛を伴わない「友情結婚」からみる親密性への問い
ー友情結婚当事者へのインタビュー調査からー

○酒井大生、白井千晶（静岡大学）

【問題と目的】

近年、「友情結婚」という性愛を伴わない結婚のあり方が注目されており、インターネットメディアや、書籍などで取り上げられている。本研究の目的は、典型的な結婚とは異なると言われる友情結婚を通して、現代日本社会における結婚の理念型とその変化を捉えることである。友情結婚に関する先行研究として、久保田（2022）が挙げられる。本研究では、近年注目される友情結婚を、「性愛の伴わない結婚」と仮定する。そして日本に在住している友情結婚であると認識して結婚生活を送っている人と、実施した経験のある人、今後友情結婚をすることが決まっている人を「友情結婚当事者」として設定し、結婚関係の内実を質的に分析する。

【研究方法】

静岡大学の倫理審査の承認を得て、インタビューを実施し、データに基づく質的調査を行った。調査協力者はX（旧Twitter）において自分たちの結婚を「友情結婚である」と自認してSNS活動を行っている20代から30代の8名である。X（旧Twitter）を用いて対象を選定した理由としては、様々な経路を得て友情結婚に参画する人達を調査の対象とできることがある。

本研究では、友情結婚における関係性はどのようなものかに焦点を当てる。そのため関係性の特徴として、満足度、平等性、継続性、共同性、（性的）排他性、恋愛、情緒性についてみていく。またそれ以外に、関係性の質は、それがどのような背景や目的から選択しているのかによって影響を受けると考えたため、友情結婚を実施するまでの経緯や配偶者選択の希望についても取り上げる。本研究では、まずインタビューで得られたデータに基づき、逐語録を作成した。

【結果】

インタビュー協力者に全員に共通する特徴として、年代が20代から30代であること、シスジェンダーであること、性的指向がヘテロセクシュアル（異性愛）ではないこと、調査時点において結婚してから2年未満であること、同居済み、もしくは同居予定であること、結婚生活に性行為はなく、婚姻・もしくはそれを想定していることであった。

【考察】

友情結婚を選択する理由は、性的指向から「異性との性行為の困難」を理由とするものと、自身の結婚観から「結婚と性愛関係を分けたい」という理由から選択されていることが分かった。また友情結婚をした人がその理由として語ったのは、「パートナー（友だち）が欲しい」という理由であった。一方で、どういったパートナーが欲しいかについては様々な意見が挙げられた。

友情結婚の内実をみると、結婚の実態は様々であることが分かった。友情結婚は、必ずしも性愛を伴わないものではなく、恋愛を伴っている関係も確認された。また恋愛以外の情緒性もそうしたニーズを持っている人がいる一方で、関係の中で情緒性が重視されていない関係も確認することができた。また性行為は伴っていないことが多いが、スキンシップをとっている関係が見られ、キス等のスキンシップのニーズを持つ人もいた。結婚外での性愛は許容されることが多かったが、性愛関係を外で持つことについて許容できないとする人も見られた。

こうした自分たちの関係性を友情結婚であると自認している人たちのインタビューから分かるのは、友情結婚であると自認している人たちが想定、実践している結婚のあり方は多義的であり、こうしたあり方が「友情結婚である」と確定することができないということである。それはセックスレスや、仮面夫婦、児童虐待など、結婚が必ずしも性愛・情緒性を伴っていないことからも自明ではあるが、結婚そのものが多様化していることを示唆するものであった。

今後の課題として、友情結婚が年数を経ることでどのように変化していくのかを確認するとともに、計量的な分析を通して結婚の実態を調査していく必要がある。

【文献】

久保田裕之,2022,「友情結婚と性愛規範:日本における仲介事業者の調査から」牟田和恵編著『フェミニズム・ジェンダー研究の挑戦:オルタナティブな社会の構想』, 44-58.

キーワード：友情結婚、結婚、性愛